

ビワノクマ古墳

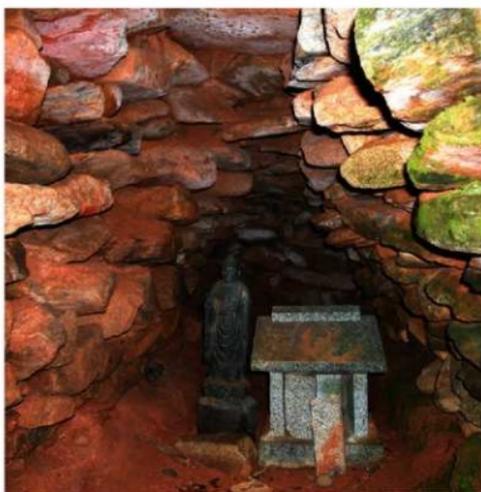
行橋市文化財調査報告書
第47集

2013

行橋市教育委員会



1. 空から見たビワノクマ古墳（南から）



2. ビワノクマ古墳の整穴式石槨

序

本書は、平成20年度から平成23年度にかけて行った、県指定史跡 ビワノクマ古墳の発掘調査の報告書です。

ビワノクマ古墳は昭和30年（1955年）、地元延永区の太平洋戦争戦没者慰霊碑の建設時に発見された遺跡で、その時に行われた緊急の調査は行橋市で行われた記念すべき最初の発掘調査でした。

それから半世紀余り経過して行った今回の調査では、従来古墳時代中期の円墳と考えられていたビワノクマ古墳が、古墳時代前期の前方後円墳であることが分かりました。この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、延永区の方々をはじめ、福岡県教育委員会、九州歴史資料館等の関係各位に深く感謝いたします。

平成25年3月

行橋市教育委員会
教育長 山田 英俊

例 言

1. 本書は、福岡県行橋市大字延永 571 番地に所在する、福岡県史跡 ビワノクマ古墳の発掘調査報告書である。平成 20 年度から平成 23 年度の 4 ヶ年にわたり調査を実施した。
2. 調査は行橋市教育委員会が主体となって行った。
3. 遺構実測は今村美香、工藤祥子、佐藤愛子、島木邦子、田中すま子、谷口貞子、中島裕子、古木初子、山口佳織、山口裕平、渡邊知栄が行った。
4. 遺構写真は山口裕平が撮影した。
5. 遺構図の整理は鎌田尚子、山口裕平が行った。
6. 遺物の接合・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。
7. 遺物の実測は定野美津子、山口裕平が行った。
8. 遺物写真は山口裕平が撮影した。
9. 遺構・遺物図面の浄書は鎌田、松尾留衣が行った。
10. 本書に使用した方位は磁北である。
11. 本書に報告した遺物・図面・写真は行橋市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆・編集は山口裕平が行った。

本文目次

| | |
|-------------------------|----|
| 第1章 調査の経緯と経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査体制 | 1 |
| 第3節 調査の経過（日誌抄） | 2 |
| (1) 第2次調査 | 2 |
| (2) 第3次調査 | 2 |
| (3) 第4次調査 | 2 |
| (4) 第5次調査 | 2 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 3 |
| 第1節 地理的環境 | 3 |
| 第2節 歴史的環境 | 3 |
| 第3章 調査の記録 | 5 |
| 第1節 第1次調査の概要とその評価 | 5 |
| 第2節 第2次調査の記録 —墳丘測量調査— | 6 |
| (1) 調査の方法 | 6 |
| (2) 測量調査からみた古墳の現状 | 6 |
| 第3節 第3～5次調査の記録 —墳丘確認調査— | 8 |
| (1) 調査の方法 | 8 |
| (2) 1トレンチ | 8 |
| (3) 2トレンチ | 9 |
| (4) 3トレンチ | 11 |
| (5) 4トレンチ | 11 |
| (6) 5トレンチ | 11 |
| (7) 6トレンチ | 11 |
| (8) 7トレンチ | 11 |
| (9) 8トレンチ | 13 |
| (10) 採集遺物 | 14 |
| 第4節 小結 | 15 |
| 第4章 結語 | 17 |

図版目次

- 巻頭図版 1 1. 空から見たビワノクマ古墳（南から）
2. ビワノクマ古墳の竪穴式石椁
- 図版 1 ビワノクマ古墳の位置
- 図版 2 1. ビワノクマ古墳の現状（南西から）
2. 復元された後円部墳丘
3. 後円部から菊田方面を望む
- 図版 3 1. 後円部から見た前方部墳丘（北から）
2. 前方部から見た後円部墳丘（南から）
3. 後円部墳丘（南から）
- 図版 4 1. 後円部墳丘（北東から）
2. 前方部裾部から見た墳丘全景（南から）
3. 後円部裾部から見た墳丘全景（北から）
- 図版 5 1. 1トレンチと2トレンチの位置関係（北西から）
2. 1トレンチ全景（南西から）
3. 1トレンチ北壁土層1（南西から）
- 図版 6 1. 1トレンチ北壁土層2（南東から）
2. 1トレンチ北壁土層3（南から）
3. 1トレンチ検出遺構
- 図版 7 1. 2トレンチ全景（北西から）
2. 2トレンチ西壁土層（東から）
3. 3トレンチ近世墓（南東から）
- 図版 8 1. 3トレンチ北壁土層（南東から）
2. 4トレンチ北壁土層1（南東から）
3. 4トレンチ北壁土層2（南西から）
- 図版 9 1. 5トレンチ全景（北東から）
2. 5トレンチ北壁土層（南から）
3. 6トレンチ全景（東から）
- 図版 10 1. 7トレンチ全景（南から）
2. 7トレンチ北壁土層1（南から）※近世墓
3. 7トレンチ北壁土層2（南から）
- 図版 11 1. 8トレンチ南壁・東壁土層（北から）
2. 8トレンチ北壁・西壁土層（南から）
3. 8トレンチ東壁土層（西から）
- 図版 12 ビワノクマ古墳出土遺物

挿図目次

| | |
|--------|--------------------------------|
| 第 1 図 | ビワノクマ古墳の位置 (1/2,000,000) |
| 第 2 図 | 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000) |
| 第 3 図 | ビワノクマ古墳竪穴式石槨及び遺物出土状態実測図 (1/50) |
| 第 4 図 | ビワノクマ古墳墳丘測量図 (1/250) |
| 第 5 図 | ビワノクマ古墳トレンチ配置図 (1/500) |
| 第 6 図 | 1 トレンチ実測図 (1/50) |
| 第 7 図 | 2・3 トレンチ実測図 (1/50) |
| 第 8 図 | 4・5・6 トレンチ実測図 (1/50) |
| 第 9 図 | 7・8 トレンチ実測図 (1/50) |
| 第 10 図 | ビワノクマ古墳出土遺物実測図 (1/1・1/3) |
| 第 11 図 | ビワノクマ古墳墳丘復元図 (1/250) |

表目次

| | |
|-----|----------------|
| 表 1 | ビワノクマ古墳出土遺物観察表 |
|-----|----------------|

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

ビワノクマ古墳は昭和30年(1955)の新発見に伴う緊急の発掘調査(第1次調査)を経て、同年に福岡県の史跡に指定された。その後半世紀余りが経過した現在、古墳は周囲に立ちこめた墓地の造成が進み周辺地形が旧状を失いつつあった。そのような中、識者による古墳周辺の地形観察等より、墳形が従前の円墳とは異なる前方後円墳との指摘を受けることとなった。加えて史跡の指定範囲も明確でなかったこともあり、古墳の保全のため形状と規模を早急に把握する必要性が生じた。

このため行橋市教育委員会では、平成21年2月、土地所有者の延永区と古墳の調査と保全について協議を行い、同年3月に墳丘測量調査を実施した(第2次調査)。調査の結果、前方後円墳の可能性が高まったため延永区と再度協議を行い、併せて墓地の造成計画も浮上していたことから、年度明けの平成21年4月より推定前方部墳丘の確認調査を行う運びとなり、墓地造成で影響の及ぶ範囲を中心に4ヶ所のトレンチを設定し土層観察を行った(第3次調査)。この調査において、推定前方部墳丘の人工的な造作を確認し、ビワノクマ古墳が前方後円墳であることがほぼ確実なものとなった。平成22年度は前方部西側にトレンチを1ヶ所設定し確認調査を行った(第4次調査)。最終年度の平成23年度は、後円部の規模、前方部長等を確認することを目的とし、トレンチを3ヶ所設定し調査を行った(第5次調査)。

なお調査期間中に福岡県文化財審議委員の小田富士雄氏(史跡部門会長・福岡大学名誉教授)や岡山理科大学教授の亀田修一氏、また福岡県教育庁文化財保護課、九州歴史資料館職員らの来訪があり、調査および古墳の保護について指導を受けた。調査体制は次節に示す通りである。

第2節 調査体制

現地調査(平成20～23年度)

| | | | |
|---------|-----------------------------------|-------------------|--------------------|
| 総括 | 行橋市教育委員会 | 教育長 | 徳永文昭(平成22年10月8日まで) |
| | | 教育長 | 山田英俊(平成22年10月9日から) |
| 調査 | | 教育部長 | 尾畑和敏(平成20～21年度) |
| | | 教育部長 | 三角正純(平成22～23年度) |
| | | 教育部文化課長 | 西井和宣(平成20～22年度) |
| | | 教育部文化課長兼文化財保護係長 | 小川秀樹(平成23年度) |
| | | 教育部文化課長補佐兼文化財保護係長 | 同(平成22年度) |
| | | 教育部文化課文化財保護係長 | 同(平成20～21年度) |
| 庶務 | | 教育部文化課文化財保護係 | 伊藤昌広 |
| | | 教育部文化課文化財保護係 | 中原博 |
| | | 教育部文化課文化財保護係 | 山口裕平(調査担当) |
| | | 教育部文化課文化振興係長 | 幸嶋智恵子 |
| | | 教育部文化課文化振興係 | 北山久美子(平成20年度) |
| | | 教育部文化課文化振興係 | 北田千砂子(平成21～23年度) |
| 発掘調査作業員 | 今村美香 岩崎末子 大村英幸 小川川若子 小野田トミエ 小淵八寿子 | | |
| | 工藤祥子 田中すま子 谷口貞子 中島裕子 長谷川進一 古木初子 | | |
| | 松尾公子 山口佳織 山本要二 吉田幸子 | | 渡邊知栄 |

報告書作成(平成24年度)

| | | | |
|----|----------|-----------------|------|
| 総括 | 行橋市教育委員会 | 教育長 | 山田英俊 |
| | | 教育部長 | 三角正純 |
| 調査 | | 教育部文化課長兼文化財保護係長 | 小川秀樹 |
| | | 教育部文化課文化財保護係 | 伊藤昌広 |

| | | |
|-------|--|--------------|
| | 教育部 文化課 文化財保護係 | 中原 博 |
| | 教育部 文化課 文化財保護係 | 山口 裕平(報告書担当) |
| 庶務 | 教育部 文化課 文化振興係長 | 幸嶋智恵子 |
| | 教育部 文化課 文化振興係 | 入生 佳奈 |
| 整理作業員 | 枝吉 恵美 奥野 康代 鎌田 尚子 佐々木 豊子 定野 美津子 松尾 留衣 松本 まゆみ | |

第3節 調査の経過(日誌抄)

(1) 第2次調査

平成21年3月11日(水)【晴れ】

本日より調査開始。測量前の木々の伐採、下草刈りを行う。

平成21年3月17日(火)【晴れ】

伐採作業が終わる。トランシットで基準杭を設定し、昼過ぎより平板測量に入る。

平成21年3月18日(水)【晴れ】

引き続き平板測量。亀田修一氏(岡山理科大学)来跡。

平成21年3月26日(木)【晴れ】

墳丘の平板測量を終える。延べ10日間の作業。

(2) 第3次調査

平成21年4月2日(木)【晴れ】

発掘道具を準備する。推定前方部墳丘に4ヶ所のトレンチ(※3~6トレンチ)を設定し、順次掘り下げを行う。下原幸裕氏(福岡県教育委員会)来跡。

平成21年4月3日(金)【曇り】

飛野博文氏(福岡県教育委員会)、城門義廣氏(同)来跡。調査指導を受ける。

平成21年4月6日(月)【晴れ】

掘りあがったトレンチから、順次写真撮影を行う。図面の作成に移る。

平成21年4月7日(火)【晴れ】

3トレンチで集石を検出する。近世墓か。

平成21年4月9日(木)【晴れ】

小池史哲氏(福岡県教育委員会)来跡。調査指導を受ける。

平成21年4月13日(月)【曇り】

トレンチはほぼ掘りあがる。小田富士雄氏(福岡県文化財審議委員)、山中英彦氏(行橋市歴史資料館)来跡。調査指導を受ける。

平成21年4月15日(水)【晴れ】

図面の作成を終え、トレンチの埋め戻しにかかる。今井京子氏(福岡県教育委員会)、國生知子氏(同)、小澤佳恵氏(同)来跡。

平成21年4月17日(金)【晴れ】

現地での作業を終える。延べ11日間の作業だった。

(3) 第4次調査

平成23年3月10日(木)【晴れ】

朝一で発掘道具を準備する。前方部墳丘の西側に1ヶ所のトレンチ(7トレンチ)を設定し、掘り下げに入る。

平成23年3月14日(月)【晴れ】

小田富士雄氏(福岡県文化財審議委員)、高橋章氏(福岡県教育委員会)、下原幸裕氏(同)来跡。調査指導

を受ける。

平成23年3月17日(木)【晴れ】

トレンチの掘り下げを終え、図面の作成に移る。宮地聡一郎氏(福岡県教育委員会)来跡。

平成23年3月24日(木)【晴れ】

飛野博文氏(福岡県教育委員会)、下原幸裕氏(同)、城門義廣氏(同)来跡。調査指導を受ける。

平成23年3月28日(月)【晴れ】

トレンチを埋め戻し、第4次調査を終了する。延べ12日間の作業だった。

(4) 第5次調査

平成23年5月18日(水)【晴れ】

発掘道具を準備する。古墳の草刈を行う。

平成23年5月20日(金)【晴れ】

後円部から前方部墳丘にかけてトレンチ(2トレンチ)を設定し、掘り下げを開始する。

平成23年6月2日(木)【晴れ】

2トレンチの掘り下げが終了し、写真撮影を行う。林正憲氏(文化庁文化財部記念物課)、吉田東明氏(福岡県教育委員会)、宮地聡一郎氏(同)来跡。後円部の調査が必要と調査指導を受ける。新規に前方部墳丘

の南外側にトレンチ(8トレンチ)を設定し、掘り下げを行う。

平成23年6月6日(月)【晴れ時々曇り】

8トレンチの掘り下げ、写真撮影を終える。一時作業を中断する。

平成23年11月30日(水)【曇り】

調査を再開する。調査区の草刈を行う。

※この間、福岡県教育委員会に文化財の現状変更許可申請を行い、許可を受ける。

平成23年12月5日(月)【晴れ】

後円部にトレンチ(1トレンチ)を設定し、掘り下げを行う。2トレンチを拡張する。

平成23年12月12日(月)【曇り】

1トレンチで地山を確認。地山に置かれた板石を検出。弥生時代の墳墓か。

平成23年12月13日(火)【晴れ】

2トレンチの写真撮影を行う。引き続き図面作成に移る。宮地聡一郎氏(福岡県教育委員会)来跡。1ト

レンチで検出した遺構は掘り下げないことにする。

平成23年12月15日(木)【晴れ】

1トレンチの掘り下げを終了し、写真撮影を行う。図面の作成に移る。

平成23年12月18日(水)【晴れ】

トレンチをすべて埋め戻し。調査を終了する。途中に中断期間を挟み、延べ30日間の調査を行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県東部に所在する（第1図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口72,787人（平成24年12月末日現在）を擁す。

市域は京都（行橋）平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔246.9m〕が東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、観山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。

市内には英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長峡川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

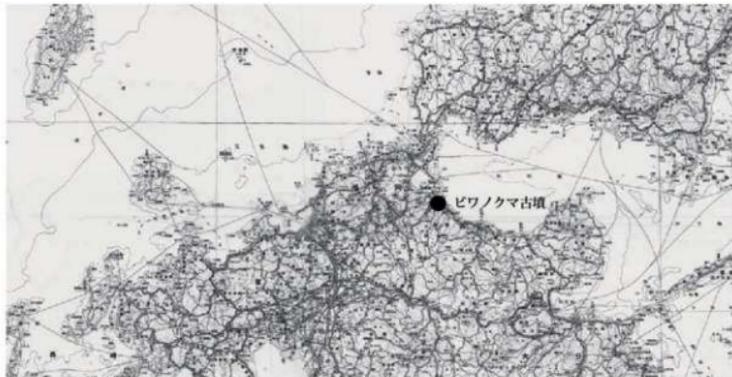
本書で報告するビワノクマ古墳は、京都平野の北側の独立丘陵上、標高25m前後に所在する。

第2節 歴史的環境

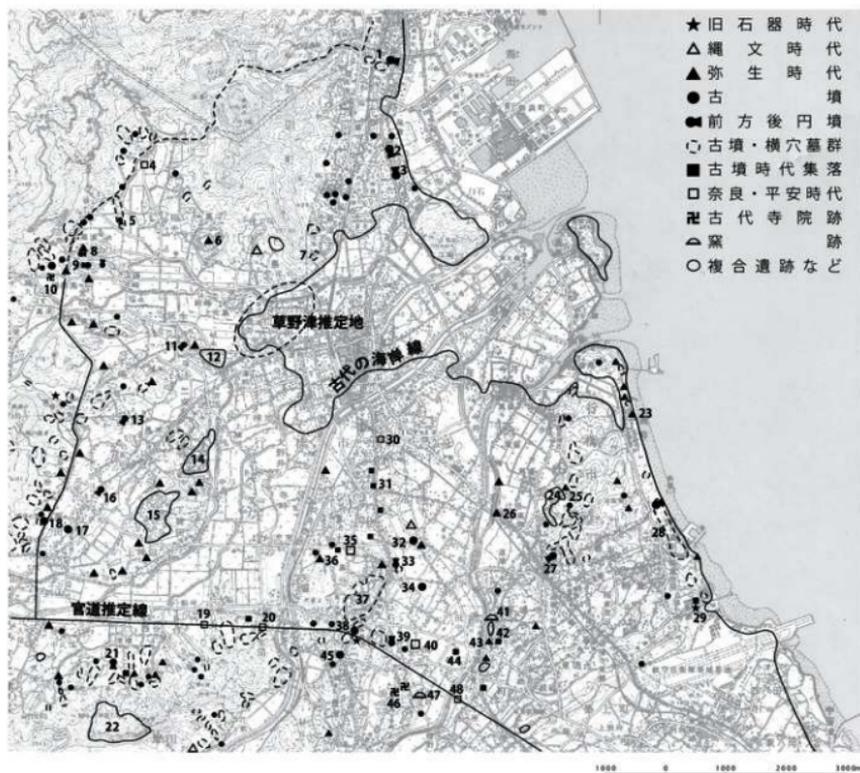
京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築築遺跡C区で該期の石器および礫群が見つかった。

続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約4800年前頃で、現在の延永―津熊―大橋―今井―津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、葦島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第2図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、草期の押型土器（竹並遺跡など）、後期の西平式系土器（下崎瀬戸溝遺跡）など各期の遺物が徐々に知られるようになって来た。

2500年前頃に境に、生業の主体と狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下碑田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。



第1図 ビワノクマ古墳の位置（1/2,000,000）



- | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 石塚山古墳 | 2. 番塚古墳 | 3. 御所山古墳 | 4. 谷遺跡 | 5. 沖後古墳 | 6. 葛ヶ川遺跡 |
| 7. 猿熊古墳群 | 8. 黒坂メウト塚古墳 | 9. 徳永丸山古墳 | 10. 橋市麿寺 | 11. ビワノクマ古墳 | 12. 延永ヤヨミ岡遺跡 |
| 13. 八雷古墳 | 14. 前田山遺跡 | 15. 下碑田遺跡 | 16. 庄屋塚古墳 | 17. 桶塚古墳 | 18. 鏡塚古墳 |
| 19. 大谷車堀遺跡 | 20. 天生田大地遺跡 | 21. 片峰1号墳 | 22. 御所ヶ谷神籠石 | 23. 長井遺跡 | 24. 代遺跡 |
| 25. 馬場代2号墳 | 26. 辻知遺跡 | 27. 牟人塚古墳 | 28. 稲童古墳群 | 29. 波築新遺跡 | 30. 崎野遺跡 |
| 31. 福富小畑遺跡 | 32. 侍塚遺跡 | 33. ヒメコ塚古墳 | 34. 鬼熊遺跡 | 35. 福前長者原遺跡 | 36. 矢留堂ノ前遺跡 |
| 37. 竹並遺跡 | 38. 甲塚方墳 | 39. 惣社古墳 | 40. 豊前国府跡 | 41. 居屋敷家跡 | 42. 駒先遺跡 |
| 43. 徳永川ノ上遺跡 | 44. 京ヶ辻遺跡 | 45. 彦徳甲塚古墳 | 46. 豊前国分寺跡 | 47. 徳政瓦窯跡 | 48. 笠見樋ノ口遺跡 |

第2図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

3世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が菊田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。7世紀になると全国的に古墳築造も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になっても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、波築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市麿寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津積に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。

本書で報告するビワノクマ古墳は古墳時代前期の遺跡である。

第3章 調査の記録

第1節 第1次調査の概要とその評価

ビワノクマ古墳は市内延永の独立丘陵上に所在する古墳である。昭和30年(1955)5月、延永区の戦没者墓地造成中に発見され、九州大学によって発掘調査が行われた。同年9月6日に福岡県の文化財(史跡)に指定された。

その概要報告は調査担当者の鏡山猛氏(九州大学教授)によって行われた⁽¹⁾。以下に引用する。

所在地 福岡県(豊前国)行橋市大字延永

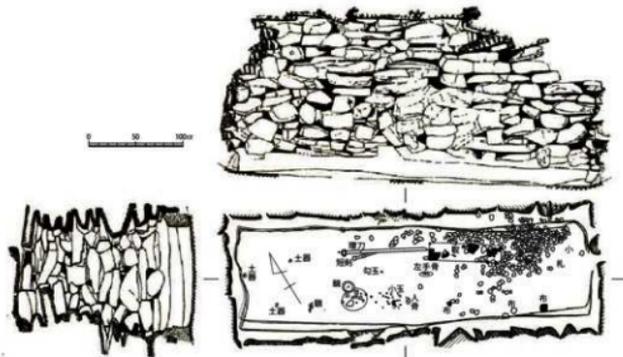
調査期日 5月1日～14日

調査者 鏡山猛・原口信行・定村貴二・田頭喬・牛島陽口・永井昌文・渡辺正気・小田富士雄

調査概要 海拔25m前後の独立丘上の、径約25m、高さ約4.5mの円墳。主軸を西北-東南にする竪穴式石室は、底面長さ約3.8m、幅1.2mの長方形、高さ1.7m。石室内床面の四周は粘土の棚状をなし、天井石の外周には径約3.5mのほぼ円形の範囲にわたり礫石がふかれていた。石室内発見の遺物は、人骨片少量、鏡1、硬玉製勾玉1、青色ガラス小玉完形51、破片4、素環頭大刀1、短剣1、鉄鏃19、織物製矢筈1具分残片、挂甲小札1領分、土器片少量、封土中より単独に鏡片2個体分、鉄鏃先1、土器片等が発見されたが、封土下部にて本古墳築造以前の埋葬の箱式石棺・土壙各2が発見され、また竪穴式石室用材に箱式石棺をくずして使用したも多く、封土内発見の鏡片等はその際の破壊されたそれらに属すると思われる。このことは本古墳が前代の墳墓を無視、破壊してつくられたことを考えせしめ、この地の古代における大きな社会的変動を示唆することくである。

概観によると、直径25m、高さ4.5mの円墳で、主体部は長さ3.8m、幅1.2m、高さ1.7mの竪穴式石室。未盗掘の石室内からは銅鏡・刀剣・靱・鉄鏃・甲冑小札など豊富な副葬品が見つかった(第3図)。なお、正式な調査報告書は未刊行である。

この概報では古墳の築造時期について言及はされていない。その後、調査者の一人である小田富士雄氏によって5世紀前半代の築造との見解が示されている⁽²⁾が、近年では、4世紀末頃と若干時期をさかのぼらせて位置づけを行っている⁽³⁾。



第3図 ビワノクマ古墳竪穴式石室及び遺物出土状態実測図(1/50)

(小田2006を改変、引用)

註

- (1) 鏡山猛 1959「福岡県行橋市琵琶隈古墳」『日本考古学年報』8
- (2) 小田富士雄 1982「琵琶隈古墳」(西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部編『福岡県百科事典 下』西日本新聞社) なお小林三郎氏も『日本古墳大辞典』中において5世紀前半の築造と位置づけている。
小林三郎 1989「琵琶隈古墳」(大塚初重ほか編『日本古墳大辞典』東京堂出版)
- (3) 小田富士雄 2006「ビワノクマ古墳」(行橋市編纂委員会編『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市)

第2節 第2次調査の記録—墳丘測量調査—

(1) 調査の方法

ビワノクマ古墳は墓地造成により地形が改変され、周辺の木々もうっそうと生い茂っていたこともあり、古墳の形状を含めた周辺地形を把握することはとても困難な状況下にあった。県史跡としての指定範囲も明確でなく、前方後円墳の可能性も指摘されたこともあり、墳丘測量調査ではそれらの問題を解消することを目的とした。

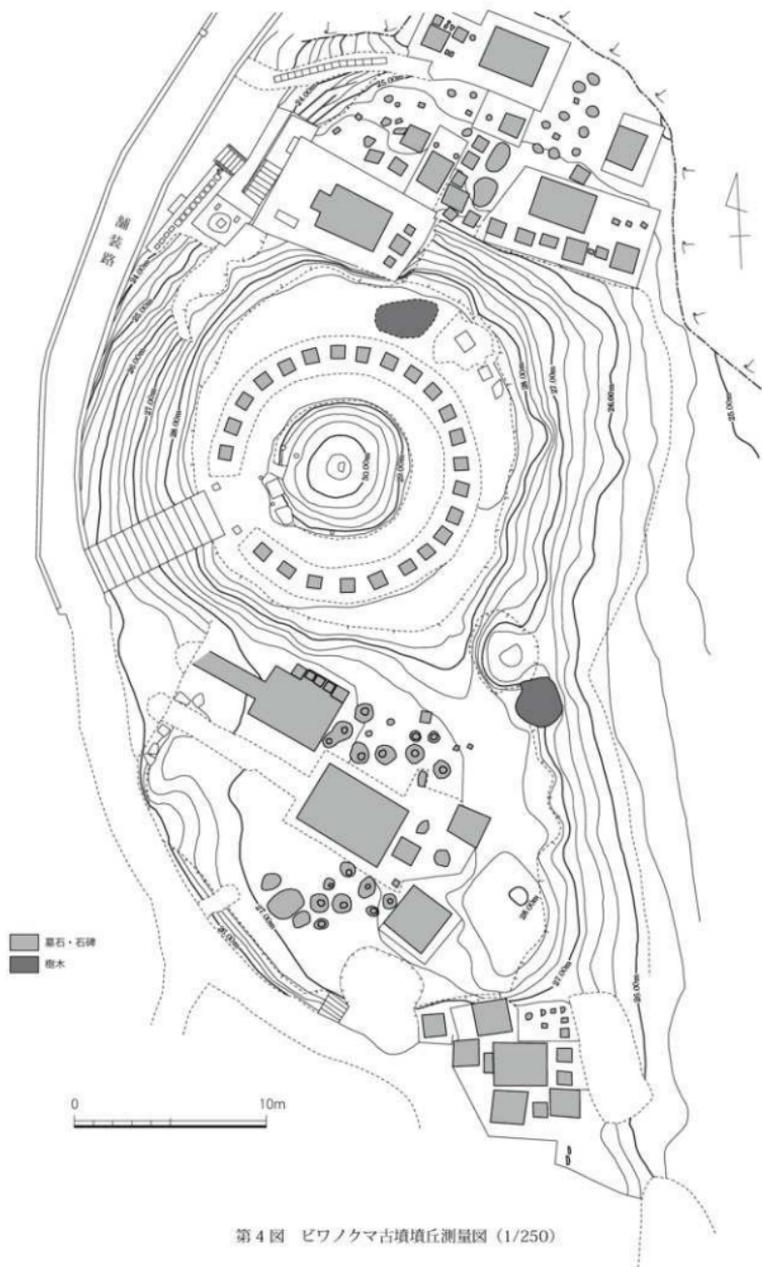
まず、墳丘上とその周辺の雑草、雑木を伐採除去した。その後、光波トランシットを用いて基準杭を設定し、そこに平板を据え、縮尺100分の1の精度で地形測量を行った。コンターラインは0.25mの間隔で計測し図示した。用いた方位は磁北である。調査は延べ10日をかけて行った。

(2) 測量調査からみた古墳の現状(第4図、図版2～4)

古墳は京都平野北側の西から東へ派生する独立丘陵上に所在する。その丘陵の北縁部、北西方向にかけて緩やかに傾斜する標高25m前後に立地する。古墳は発見以来円墳と考えられてきたが、周辺の木々の伐採した結果、円丘の南側に方形の張り出し部をもつ、前方後円形を呈す可能性が想定できた。ここでは円丘を後円部、方形の張り出しを前方部と仮定して以下記述を行う。

後円部は、北側に墓地が立ちこんで改変を受けてはいるが、墳形は旧状を比較的残すものと考えられる。墳丘の北西側より舗装された幅2mの墓参道が後円部西側の標高26m付近まで延びている。そこから中心に向かってコンクリート製の階段があり、入口左脇には見学者用の説明板を設置する(図版2-1)。階段を上りつめた標高28.5m付近は大きく造成を受け、古墳発見の契機となった延永区の戦没者慰霊碑がサークル状に立ち並んでいる。その中央には径7m、高さ1.5mの円丘が復元されており、その西裾部の開口部より竪穴式石櫛を観察することができる(図版2-2)。この円丘の頂部が丘陵の最高所となり、現状で標高30.33mを測る。したがって旧状を保つのは、慰霊碑が立ち並ぶ造成段より下位となる。まず後円部の西側は、先述の墓参道が墳裾を取り巻くように舗装されており、現況で確認できる最下部は標高23.75m付近で、造成段までの比高差は約4.75mある。墳丘は一部が流出するものの、ほぼ均等にコンターラインがめぐり、旧状を良く保っているものと考えられる(図版3-3)。一方東側は後世の開削をうかがうことはできないが、木々が立ちこみによるコンターラインの乱れを見て取れる。墳丘裾部はあまり明確ではないが、コンターラインの間隔が広がってくる標高26m前後と考えることができる(図版4-3)。北側は先述の通り、近世以来の墓地が立ちこんでいる(図版4-1)。前方部へと連なる南側に目を転じると、その西側は墓地造成により大きく改変を受けているが、東側は直径4mの凹み(土取りによるものか)があることを除けば、比較的旧状を保っている(図版3-1)。以上より想定される後円部の規模は、中央の復元円丘を中心に据え、旧状を保つと考える北西側までを半径とした直径30m程であろう。墳丘高は上方が削られているため明確にできないが、現存高4.75mを測る。なお緩斜面に築かれているため、墳丘高は西側が東側より2m程高くなる。

前方部は木々が立ちこめており十分な地表観察ができなかったが、雑草、雑木の伐採除去により、東側において明瞭な平坦面と斜面を確認することができた。まず上方の平坦面は南側が高く標高28m程である。そして後円部のある北側に緩やかに傾斜し、後円部墳丘に取り付く(図版3-2)。斜面はほぼ均等にコンターラインが通る。墳丘裾部は明確ではないが、コンターラインの間隔が広がってくる標高26m



前後と考えることができる（図版4-2）。一方、以前より観察ができた西側は、近世から現在の墓が立ち並び、旧状を保っていないと考えられる。南側には隣接する墓地との間に高さ1m弱の段差があり、これを前方部端部とも考えることができる。墓地造成による造作とも否定はできないが、現状でこれを前方部端部とすると前方部長は約20mとなる。前方部の幅は上述の西側の現況より明らかにできないが、墳丘高は現状で裾部と平坦面の比高の2mである。

なお後円部、前方部ともに墳丘の段築の有無は明確にし得ない。ただ、後円部の造成段は、一段目のテラスであった可能性は考えられる。また周溝や周堤などの付属施設は観察できず、埴輪や葺石などの外表施設もないものと考えられる。

以上の測量成果より、ビワノクマ古墳は前方後円墳の可能性が高く、その規模は現存長で約50mを測る。古墳の主軸は明確にしえないが、南北を基準とするものであろう。

第3節 第3～5次調査の記録—墳丘確認調査—

(1) 調査の方法

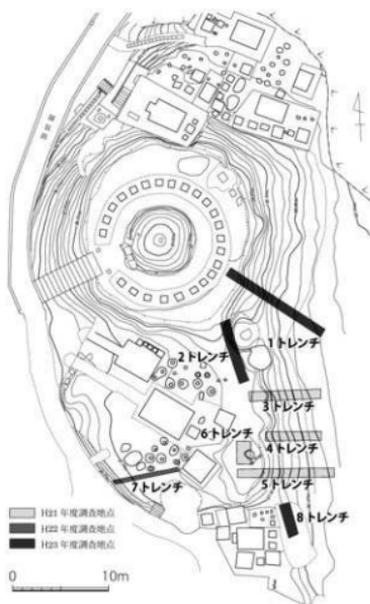
墳丘測量調査に引き続き、トレンチ（試掘溝）による確認調査を行った。トレンチの設置地点、調査年度は第5図に示す通りである。トレンチの掘り下げはすべて人力で行った。掘り下げ後に壁面を分層し土層観察を行い、縮尺20分の1で平面図、土層図を作成した。土層の色調の判別には土色帖（小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1995年版）を使用した。トレンチの写真撮影は、35ミリ白黒フィルム、同カラーリバーサルフィルムで調査の進展に従い順次行った。また補助的にデジタルカメラでの撮影も行った。

(2) 1トレンチ（第6図、図版5・6）

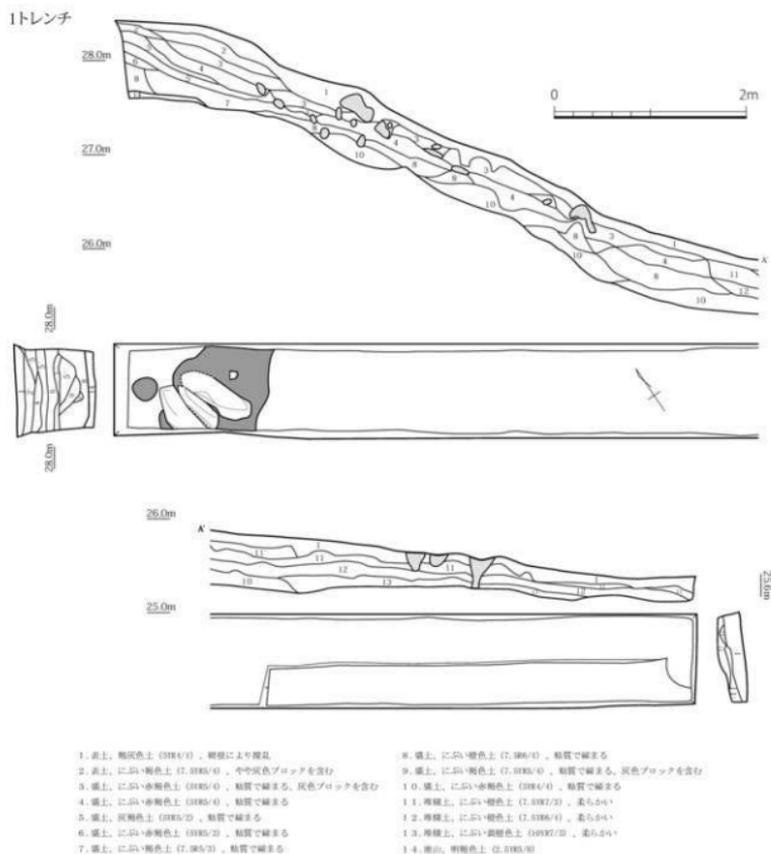
後円部墳丘の規模および構造を確認するため、第5次調査時に後円部東側に設定した。長さ11.8m、幅1mを測る。墳丘部の基本層序は上から表土、墳丘盛土、地山となる。

表土下より墳丘盛土を確認した。盛土表面は樹根の攪乱を受け凹凸があり、多少の流出が考えられるものの、残りの良い上方では0.7m程の厚みがある。褐色ないし橙色系の粘質土を重ねて積む。盛土はトレンチの西端から7.6mの範囲で確認でき、その東端が後円部墳丘の裾部と考えられる。地山は明るい褐色土である。なおトレンチの上方で地山に掘り込む直径30cmの柱穴と板状石材を3つ確認した（図版6-3）が、今回の調査では検出で止め、掘り下げは行わなかった。検出面のレベルはおおよそ標高27.6mである。柱穴の埋土は黒褐色を呈す。これらの遺構の性格は現状では明確にできないが、周辺の調査状況より古墳築造以前、具体的には弥生期の墳墓遺構の可能性はある。

一方、墳丘裾部の外側ではしまりのない橙色系の土が堆積していた。墳丘を取り囲む周溝状の掘り込みはない。出土遺物はなかった。



第5図 ビワノクマ古墳トレンチ配置図（1/500）



第6図 1トレンチ実測図 (1/50)

(3) 2トレンチ (第7図、図版5・7)

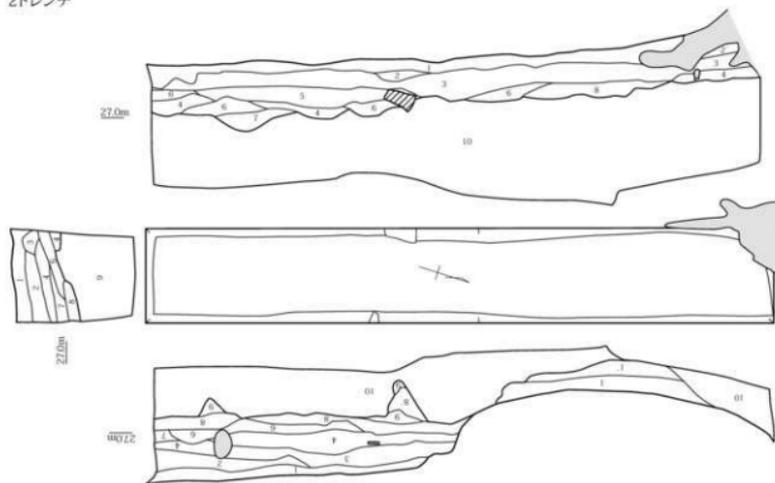
後部部と前方部の関係を確認するため、第5次調査時に後部部南側に設定した。長さ6.5m、幅1mを測る。基本層序は上から表土、填丘盛土、旧表土、地山となる。

トレンチを設定した地点は、調査以前より大きな凹みがあり、落ち葉やゴミが堆積していた。よって、トレンチ東壁の北半分は大きく抉れている。他の壁面では表土下で最大厚さ0.5mの水平に重なる土層を確認した。褐色ないし橙色系の粘質土で、填丘盛土と考えられる。南壁面より東から西に傾斜して積まれていることが観察できる。その下位は明るい赤褐色の地山層となるが、一部、旧表土と考えられる灰褐色土を包含する。

遺物は表土より出土した須恵器と土師器の小片がある。

須恵器 1は甕もしくは壺の胴部片。外面にタタキ調整を施し、内面に当具痕を残す。

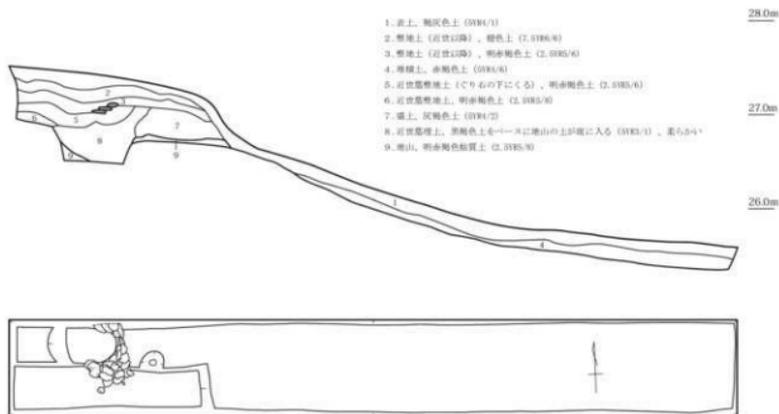
2トレンチ



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. 表土, にがい褐色土 (T.0395/4) | 6. 礫土, にがい赤褐色土 (S193/2) |
| 2. 礫土, にがい褐色土 (S195/4) | 7. 礫土, 反褐色土 (S194/2) |
| 3. 礫土, 棕色土 (S196/6) | 8. 砂表土, 褐色土 (S197/4) |
| 4. 礫土, にがい赤褐色土 (S193/4) | 9. 砂表土, 褐色土 (T.0394/4) |
| 5. 礫土, 反褐色土 (S195/2) | 10. 埋山, 明赤褐色土 (T.0395/3) |

0 2m

3トレンチ



- | | |
|---|-------|
| 1. 表土, 褐色土 (S191/3) | 28.0m |
| 2. 礫土 (近世以降), 棕色土 (T.0396/6) | |
| 3. 礫土 (近世以降), 明赤褐色土 (T.0395/6) | |
| 4. 埋土, 赤褐色土 (S193/6) | |
| 5. 近世基壇土 (C?り石の下にくる), 明赤褐色土 (T.0395/6) | |
| 6. 近世基壇土, 明赤褐色土 (T.0395/3) | 27.0m |
| 7. 礫土, 反褐色土 (S194/2) | |
| 8. 近世基壇土, 褐色土をベースに埋山の上?層に入る (S193/3), 裏ら54° | |
| 9. 埋山, 明赤褐色粘質土 (T.0395/3) | 26.0m |

第7図 2・3トレンチ実測図 (1/50)

土師器 2～4は坯もしくは皿の底部片。2は底径8.6cmに復元できる。

(4) 3トレンチ (第7図、図版7・8)

前方部の規模ないし構造を確認することを目的とし、第3次調査時に墓地造成の影響を受ける前方部東側斜面に設定した。長さ7.6m、幅1mを測る。トレンチの西側では表土下に水平に堆積する土層を確認した。その下層の標高27.1m付近で拳大の礫を多く検出した。その下位には填丘盛土と考えられる灰褐色土に掘り込む土坑があり、周辺の状況から近世墓の墓壇と判断した。したがって礫の上層は近世以降の整地層と判断した。一方その外側のトレンチ西側は表土下が地山となる。トレンチ西端から4.6mの地点で地山の傾斜変換点があり、ここが前方部填丘の裾部と考えられる。ここでは地山を削り出して填丘とし、上方では盛土をもつ構造と判断できた。なお出土遺物は無かった。

(5) 4トレンチ (第8図、図版8)

3トレンチと同様に前方部の規模、構造を確認するために第3次調査時に設定した。位置は3トレンチの南側の墓地造成の影響を受ける地点になる。長さ5.9m、幅1mを測る。トレンチの西側では、表土下で橙色ないし褐色土を検出した。粘質土でよく締まっていることから填丘盛土と判断した。その下位は一部で攪乱層を包含するが赤褐色を呈す地山となる。盛土を確認できたトレンチ西端から3.6m地点が填丘の裾部と考えられる。

出土遺物に陶胎染付、石籬片がある。

陶胎染付 5は碗。口縁部片で外面は呉須で条線を絵付けする。内面の口唇部には熔着痕を残す。肥前産で18世紀前後の所産か。トレンチ東側の堆積土より出土した。

石器 6は打製石籬。両翼を欠く。残存長1.35cm、残存最大幅1.05cm、厚み0.3cm、重さ0.44gである。安山岩製。

(6) 5トレンチ (第8図、図版9)

同じく第3次調査時に設定した。位置は4トレンチの南で、前方部の平坦面から斜面にあたる。同様に墓地造成の影響を受ける地点になる。長さ10.2m、幅1mを測る。表土下に薄く堆積層を挟み、その下は赤褐色の地山となる。トレンチ西側の平坦面上には近世の墓石を落とし込んだ土坑が1基ある。盛土と考えられる土層はなく、平坦面、斜面ともに地山を削り、前方部填丘を造り出したと判断できる。トレンチ西端から約3mの地点に地山の変換点があり東に傾斜する。填丘平坦面と斜面の境と考えられる。その変換点からさらに5.3mの地点で変換点を認めることができ、前方部填丘の裾部と判断した。出土遺物は無かった。

(7) 6トレンチ (第8図、図版9)

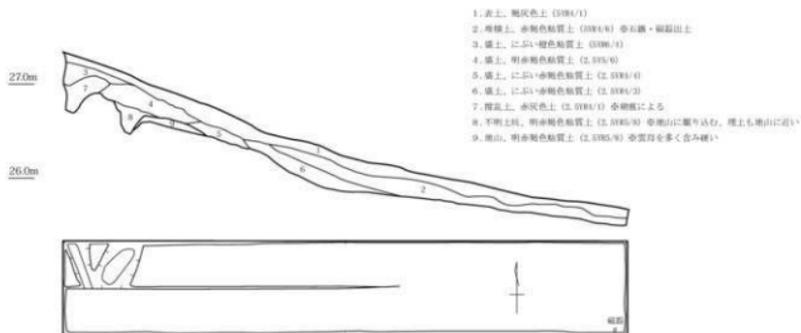
同様に第3次調査時に設定した。5トレンチの北に接した前方部平坦面上で、やはり墓地造成の影響を受ける地点である。長さ2.5m、幅1.5mを測る。表土下には薄く堆積層があり、その下は赤褐色の地山となる。南側で検出した土坑は、前述の5トレンチで検出した土坑につながるものである。出土遺物は無かった。

(8) 7トレンチ (第9図、図版10)

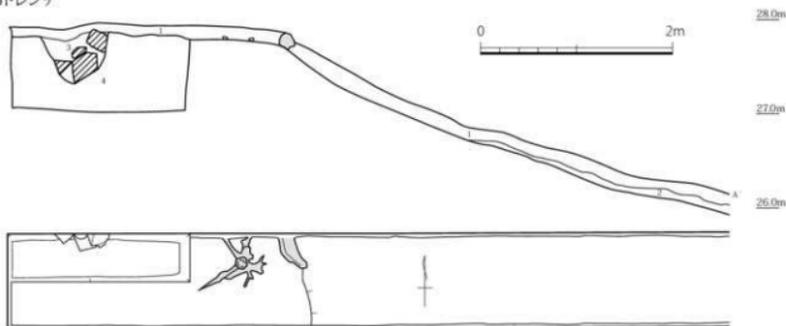
前方部填丘の西側の状況を確認するため、第4次調査時に設定した。長さ6.4m、幅0.5mを測る。トレンチの中央には幅1.25m程の堅坑があり、周辺の状況より近世墓の墓壇と判断した。それより西側にはしまりのない褐色、橙色の土が堆積し、表土下0.7m程で明褐色の地山となる。東側は表土下で橙色土の重なった層を検出した。よく締まった粘質土で、前方部填丘の残りだと判断した。その下層の地山には黒褐色を埋土とする土坑が掘り込まれており、後述の弥生土器片が出土した。周辺の調査状況より弥生期の墳墓遺構の可能性はある。

弥生土器 7は甕か。胴部片で焼成は悪く、調整も明瞭でない。

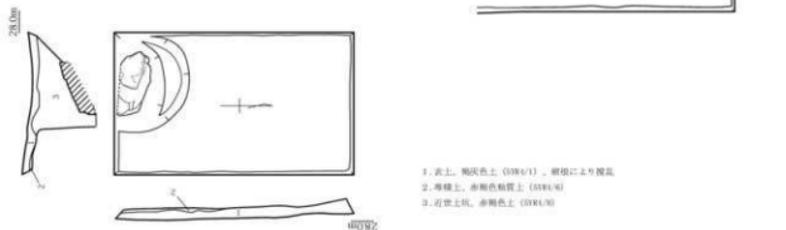
4トレンチ



5トレンチ

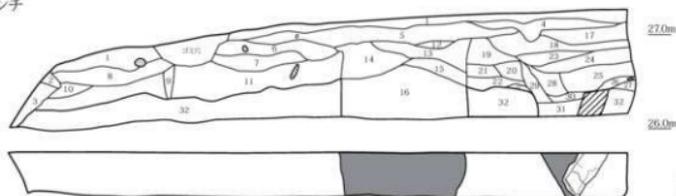


6トレンチ



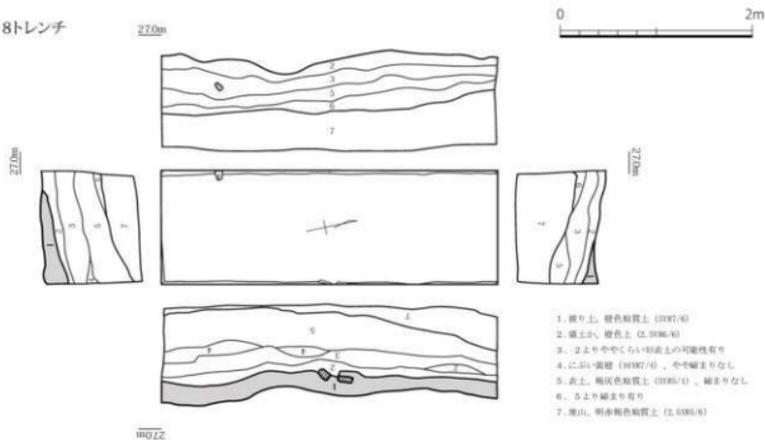
第8図 4・5・6トレンチ実測図 (1/50)

7トレンチ



- | | |
|---|--|
| 1. 表土、暗黄 | 17. 表土、にじい褐色粘質土 (2.0386/0) |
| 2. 黒灰色粘質土 (2.0385/1)、硬質 | 18. 表土、にじい褐色粘質土 (2.0387/4) |
| 3. 表土、にじい褐色粘質土 (2.0385/3) | 19. 表土、褐色粘質土 (2.0387/6)、締まりがよい |
| 4. 今や壊った褐色粘質土 | 20. 表土、褐色粘質土 (2.0387/6)、今や壊りすぎた |
| 5. 褐色粘質土 (2.0386/4) | 21. 表土、にじい褐色土に黒色土ブロックを含む (2.0386/4)、締まりがよい |
| 6. にじい褐色粘質土 (2.0386/0) | 22. 表土、にじい褐色土 (2.0386/0)、締まりがよい |
| 7. にじい褐色粘質土 (2.0385/4) | 23. 膠理土か、黒灰粘質土に多く褐色土ブロック含む (2.0384/3) |
| 8. にじい褐色粘質土 (2.0385/0) | 24. 膠理土か、黒灰粘質土に褐色土ブロック含む (2.0384/0) |
| 9. 黒灰色粘質土に褐色粘質土を含む、硬質 | 25. 膠理土か、黒灰粘質土に少し褐色土ブロックを含む (2.0382/2) |
| 10. 褐色粘質土 (2.0386/6) | 26. 膠理土か、黒灰粘質土に褐色土ブロックを含む (2.0382/1) |
| 11. 褐色粘質土 (2.0386/6) | 27. 地山か、褐色粘質土 (2.0386/6) |
| 12. 若世膠理土、1.9 にじい色や黄ばんだにじい赤褐色粘質土 | 28. 膠理土か、黒灰粘質土に褐色土ブロックを含む (2.0382/1) |
| 13. 若世膠理土、にじい赤褐色粘質土 (2.0385/4) | 29. 膠理土か、黒灰粘質土に黒色土ブロックも含んだが、にじい褐色土に黒色土ブロックを含む (2.0385/0) |
| 14. 若世膠理土、1.6 にじい色や明るい明赤褐色粘質土 | 30. 膠理土か、黒灰粘質土 (2.0383/2)、土層出土 |
| 15. 若世膠理土、1.6 にじい色や黄ばんだにじい赤褐色土 (2.0385/4) | 31. 膠理土か、にじい褐色粘質土 (2.0386/0) |
| 16. 若世膠理土、明赤褐色粘質土 (2.0385/6) | 32. 地山、明赤褐色粘質土 (2.0385/6) |

8トレンチ



- | |
|-------------------------------|
| 1. 硬り土、褐色粘質土 (2.0387/6) |
| 2. 硬り土、褐色土 (2.0386/0) |
| 3. 2よりやや中くらい硬り土上の可能性あり |
| 4. にじい黄褐色 (2.0387/0)、今や締まりなし |
| 5. 表土、黒灰色粘質土 (2.0385/0)、締まりなし |
| 6. 5より締まり有り |
| 7. 地山、明赤褐色粘質土 (2.0385/6) |

第9図 7・8トレンチ実測図 (1/50)

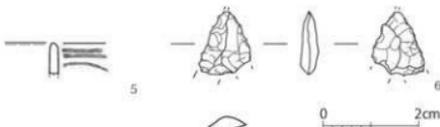
(9) 8トレンチ (第9図、図版11)

前方部墳丘の規模を確認するため、第5次調査時に設定した。位置は5トレンチの南側で、前方部の張り出しから一段下がった地点である。長さ3.5m、幅1.2mを測る。最上層は近年の墓地造成に伴う残土が積まれており、その下に本来の表土を確認した。その下層に厚さ0.5m程の褐色土を確認でき、他のトレンチの状況から墳丘盛土の可能性も考えられるが断言はできない。北壁面、南壁面の観察では東から西に傾斜して積まれていることが観察できる。表土より銹軸を施した土器片が出土した。

2トレンチ



4トレンチ



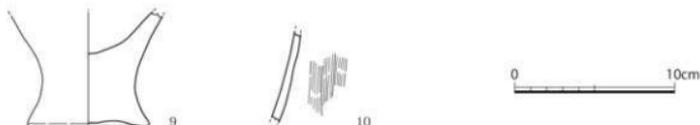
7トレンチ



8トレンチ



採集



第10図 ビワノクマ古墳出土遺物実測図(1/1・1/3)

| 番号 | 出土遺物 | 種別 | 形状 | 法量 (cm) | 図形 | 構成 | 素材 | 包圍 | 残片 | 備考 |
|----|---------|------|----|--|-------------------------|----|----|--------------------------|-----|-----|
| 1 | 2トレンチ上層 | 須臾器 | 楕円 | 残高3.6 | 内:コナデ(50%程度) 外:オボコタテ | 良好 | 陶器 | 内:内径50% 外:外径50% | 残片 | |
| 2 | 2トレンチ上層 | 土師器 | 杯 | 残高2.0 底径4.6 | 内:コナデ 外:コナデ | 良好 | 陶器 | 内径:約7.5/8% 外径:約7.5/8% | 底層 | |
| 3 | 2トレンチ上層 | 土師器 | 杯 | 残高1.1 | 内:コナデ 外:コナデ | 良好 | 陶器 | 内径:約7.5/8% 外径:約7.5/8% | 底層 | |
| 4 | 2トレンチ上層 | 土師器 | 杯 | 残高0.9 | 内:コナデ 外:コナデ | 良好 | 陶器 | 内径:約7.5/8% 外径:約7.5/8% | 底層 | |
| 5 | 4トレンチ | 陶器片 | 片 | 残高2.05 | 内:コナデ 外:コナデ | 良好 | 陶器 | 内径:約7.5/8% 外径:約7.5/8% | 底層 | |
| 6 | 4トレンチ | 石蔵 | — | 最大径1.30 最大幅1.05 厚さ0.3 重さ0.44g | — | — | — | 内径:約7.5/8% | 南東角 | 石山石 |
| 7 | 7トレンチ | 弥生土器 | 楕円 | 残高8.2 | 内:コナデ 外:コナデ | 不良 | 陶器 | 内径:約7.5/8% 外径:約7.5/8% | 底層 | |
| 8 | 8トレンチ上層 | 須臾器 | 楕円 | 残高2.4 | 内:コナデ 外:コナデ | 良好 | 陶器 | 内径:約7.5/8% 外径:約7.5/8% | 底層 | |
| 9 | 採集 | 弥生土器 | 片 | 最大径7.6 残高7.6 | 内:コナデ 外:コナデ | 良好 | 陶器 | 内径:約7.5/8% 外径:約7.5/8% | 底層 | |
| 10 | 採集 | 弥生土器 | 楕円 | 残高5.8 | 内:コナデ 外:コナデ | 良好 | 陶器 | 内径:約7.5/8% 外径:約7.5/8% | 底層 | |

表1 ビワノクマ古墳出土遺物観察表

銹釉土器 8は塊の欠片か。素地は土師質で、成形後に内外面ともに銹釉を刷毛塗りし、外面には飛塵をかける。

(10) 採集遺物(第10図、図版12、表1)

測量調査中に弥生土器を2点採集した。

弥生土器 9は甕の底部。10は甕と思しき胴部片。外面にはスガが付着する。いずれもビワノクマ古墳に伴う遺物ではなく、前時代に营造された弥生墓地に関連する遺物と考えられる。

第4節 小結

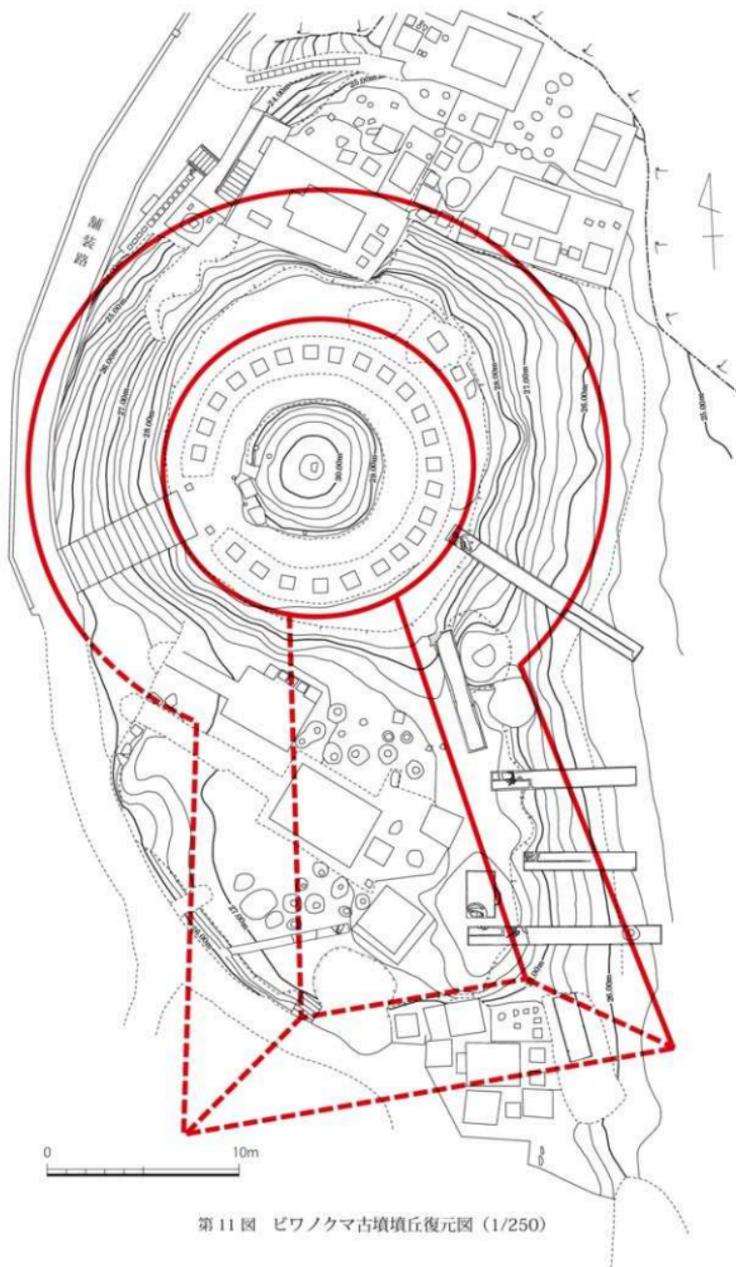
以上の墳丘測量調査、墳丘確認調査をもとに、ビワノクマ古墳の形状、規模、構造をまとめたい。

まず墳形は従来円墳と考えられてきたが、今回の調査より前方後円墳であることが明らかになったといえよう。前方部西側は墓地造成による改変を大きく受けているが、東側では測量調査前の雑草、雑木の伐採除去により、墳丘と考えられる明確な段を観察することができた。そしてその地形は測量調査によって作成した図面上ではっきり現れることとなった。前方後円墳であることを確認するものにしたのは、続いて行ったトレンチによる発掘調査である。特に2トレンチの調査成果により円墳ではないことが明確になった。すなわち、仮に円墳だと考えるならば、南に連なる方形の張り出しとを切り離す、例えば周溝状の施設がなくてはならないが、2トレンチの西壁ないし東壁の土層図ではそのような痕跡はなく、円丘と方形の張り出しをつなぐように地山上に積まれた土の重なりを確認できた。他のトレンチでも、明褐色の地山の上によく締まった褐色、橙色の粘質土の重なりがあり、人工的な造作によって築かれた墳丘盛土と判断した。

規模についてだが、後円部は測量調査成果より中央の復元円丘を中心に据え、旧状を保つと考える北西側までを半径とした直径30m程と想定した。この裾部は1トレンチで検出した墳丘盛土の東端部とほぼ一致し、発掘調査成果からもその成果を追認することとなった。したがって後円部の大きさは直径30mとなる。高さは上部が削平を受けているため、今となっては明らかにできないが、現状高は西側で4.75mを測り、おそらくあと2～3mはあったものと思われる。段築は確認できないが、この削平面が一段目のテラスであった可能性も指摘しておきたい。一方の前方部は墳丘測量図より東側裾部を標高26m前後に想定した。ここでは3・4・5トレンチの調査成果が重要となる。まず3トレンチでは、トレンチ西端から4.6m地点にある地山の傾斜変換点を裾部と考えた。4トレンチではトレンチ西端から3.6mの範囲に地山上に盛土を確認し、その東端が墳丘の裾部と考えた。5トレンチでは地山を削り出して墳丘を形作り、墳丘裾部は地山の傾斜変換点であるトレンチ西端から8.3m地点になる。以上の3点は厳密に真っ直ぐにはつながらないが、墳丘測量の成果より想定したラインとあまり矛盾はなく、暫定的ではあるが前方部墳丘の東側裾部と考えたい。西側は7トレンチの調査成果から墓地造成により墳丘を外側に押し広げた状況を確認したが、墳丘裾部を確認するには至らなかった。したがって上記で復元した後円部墳丘を二等分するラインを主軸として、前方部墳丘の東側裾部を折り返し西側裾部の復元を行った。後円部と前方部が接続するくびれ部の幅は約18mとなる。前方部長は、現在残る南側墓地との段差を前方部平坦面の端部と考え、そこから斜面を復元するとくびれ部からの長さが22mほどとなる。

したがって、今回の調査成果を踏まえて復元したビワノクマ古墳の墳丘は右に示した第11図のようになり、墳長約50mを測る。

ビワノクマ古墳は南東方向から北西方向に緩やかに傾斜する尾根上に築かれている。後円部は古墳の下層に弥生時代の墳墓が発見されていることより、基本的に盛土によって形成されている。一方、前方部は3トレンチや5トレンチの調査成果より、尾根を造作し、地山を削り出して墳丘成形を行い、補助的に盛土をし整形していると判断できる。周溝や周堤などの施設はなく、葺石、埴輪はみられない。



第11図 ビワノクマ古墳墳丘復元図(1/250)

第4章 結語

これまでの調査で、従来径25mの円墳と考えられてきたビワノクマ古墳は、後円部径30m、全長50m程の前方後円墳であることが分かった。竪穴式石櫛の調査が行われた第1次調査の報告書が未刊行であるため、副葬品の詳細な検討が行われておらず古墳の築造時期については細かな言及はできないが、近年の傾向では古墳時代前期にさかのぼる古墳として考えられるようになってきた。ここでは結語としてビワノクマ古墳の意義について述べたい。

まず1点は、行橋市内で確認された最古の前方後円墳ということである。市内ではこれまで6基の前方後円墳が確認されているが、いずれも古墳時代中期以降の築造が想定されている⁽¹⁾。ビワノクマ古墳は、上述のように前期古墳と考えられるようになったが、その根拠は竪穴式石櫛を主体部することと副葬品組成による。あわせて昭和30年の発掘調査から時をおかずして県の史跡に指定されたが、行橋市内で唯一の県指定文化財の古墳であることも付記しておく。

ビワノクマ古墳の築造時期が古墳時代前期にさかのぼることにより、当地における古墳時代前期の首長系譜の見直し、再検討を迫られることとなった。ビワノクマ古墳のある京都平野では、前期古墳として行橋市の北に位置する菊田町の石塚山古墳があまりにも有名である。その築造時期は4世紀初頭を前後する時期と考えられ、京都平野における古墳時代首長系譜の初代に位置づけられてきた。その後の首長系譜は同じく菊田町にある中期古墳の御所山古墳に連なるものと考えられているが、その間には約100年余りの空白期があり、その連なりが上手く解釈できずにいた⁽²⁾。すなわちビワノクマ古墳が前期の前方後円墳で、上位の埋葬施設である竪穴式石櫛を内蔵することはその空白期を埋める可能性があるということになる。その場合、京都平野北縁部の菊田地域から少し内陸に入ったこの延永の地に、勢力の中心が一時的に移ったことが考えられるが、このことは周辺における当該期の集落分布などと併せて考察する必要がある。幸いにも、近年に行われた東九州自動車道の整備に伴い、ビワノクマ古墳の東の低位段丘上では古墳時代前期の大規模集落（延永ヤヨミ園遺跡）が発見されており、今後の研究の進展が期待される⁽³⁾。

度々述べてきたが、古墳の周辺は墓地が立ちこめ今後も新たな造成が行われる可能性もあろう。今回の調査要因の1つは墓地造成によるものであり、これにより新たに確認した前方部の一部が損なわれたことは誠に遺憾なことである。調査担当者として文化財保護行政の難しさを改めて痛感した次第である。本書によって、ビワノクマ古墳に対する関心が深まり、今後の保全や指定面積の拡張につながれば望外の喜びである。

註

- (1) 八雷古墳、石並古墳（稲童20号墳）、単人塚古墳、徳永丸山古墳、片峰1号墳、徳永夫婦塚古墳の6基。
- (2) 宇野嶺敏 2010「豊前首長系譜にみる画期と歴史的意義」『九州における首長系譜の再検討』（第13回九州前方後円墳研究会 鹿児島大会）など。
- (3) 『平成21年度・平成22年度 延永ヤヨミ園遺跡現地説明会資料』

图 版



(1960年6月5日撮影 国土地理院発行を転載)

ビワノクマ古墳の位置



1. ビワノクマ古墳の
現状（南西から）



2. 復元された後円部墳丘



3. 後円部から菊田方面を望む

1. 後円部から見た
前方部墳丘（北から）



2. 前方部から見た
後円部墳丘（南から）



3. 後円部墳丘（南から）





1. 後円部墳丘（北東から）



2. 前方部裾部から見た
墳丘全景（南から）



3 後円部裾部から見た
墳丘全景（北から）

1.1 トレンチと2トレンチの
位置関係 (北西から)



2.1 トレンチ全景
(南西から)



3.1 トレンチ北壁土層1
(南西から)





1.1 トレンチ北壁土層2
(南東から)



2.1 トレンチ北壁土層3
(南から)



3.1 トレンチ検出遺構

1. 2 トレンチ全景
(北西から)



2. 2 トレンチ西壁土層
(東から)



3. 3 トレンチ近世墓
(南東から)





1.3 トレンチ北壁土層
(南東から)



2.4 トレンチ北壁土層 1
(南東から)



3.4 トレンチ北壁土層 2
(南西から)

1.5 トレンチ全景
(南東から)



2.5 トレンチ北壁土層
(南から)



3.6 トレンチ全景
(東から)





1.7 トレンチ全景
(南から)



2.7 トレンチ北壁土層 1
(南から) ※近世墓



3.7 トレンチ北壁土層 2
(南から)



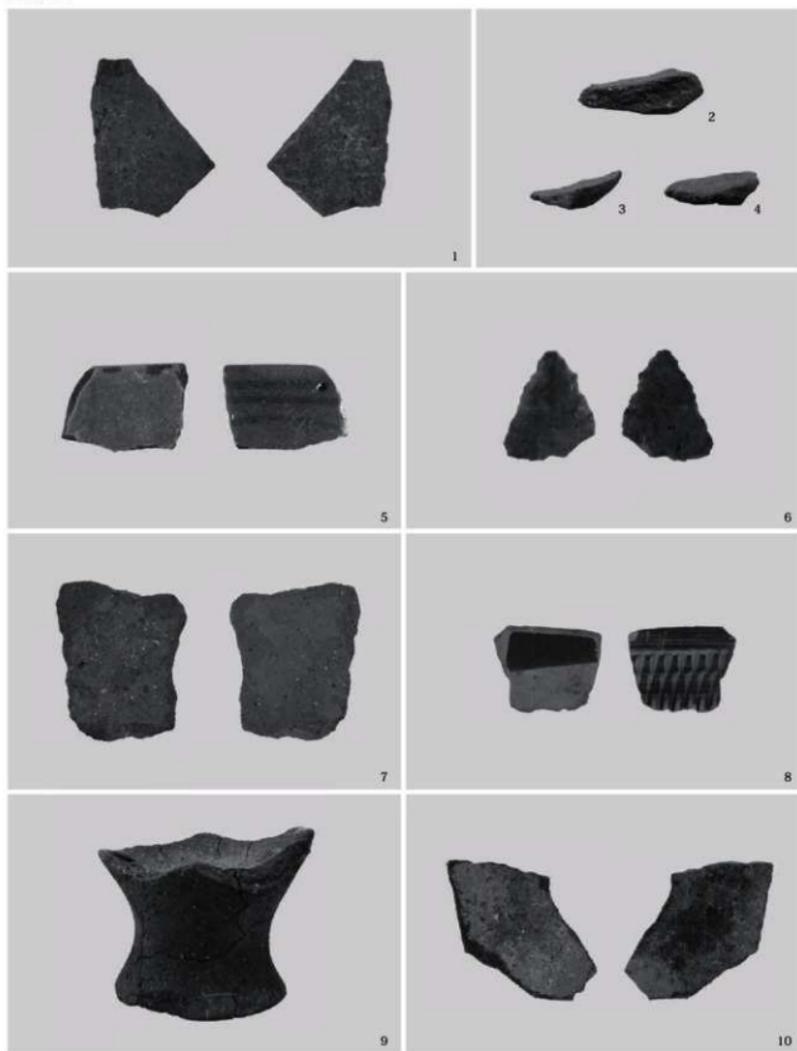
1. 8トレンチ南壁・
東壁土層（北から）



2. 8トレンチ北壁・
西壁土層（南から）



3. 8トレンチ東壁土層
（西から）



ビワノクマ古墳出土遺物

報 告 書 抄 録

| ふりがな | ひわのくまこふん | | | | | | | | | | | |
|---------------------|--|--------|----------|-------------------|--------------------|---------------------------|-------------------|------|---------|--------|---------------------|--------------------|
| 書名 | ビワノクマ古墳 | | | | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 行橋市文化財調査報告書 | | | | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第 47 集 | | | | | | | | | | | |
| 編著者名 | 山口裕平 | | | | | | | | | | | |
| 編集機関 | 行橋市教育委員会 | | | | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒824-8601 福岡県行橋市中央 1 丁目 1 番 1 号 TEL 0930-25-1111 FAX 0930-25-1582 | | | | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2013 年 3 月 28 日 | | | | | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北 緯 | 東 経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | | | | |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | | | | | |
| ひわのくまこふん ビワノクマ古墳 | ふくおか県くまもと市 福岡県行橋市 大字延永 571 番地 | 402133 | 14115003 | 33° 43' 54" | 130° 56' 33" | 20090311 ～ 20090326 | — | 内容確認 | | | | |
| | | | | | | 20090402 ～ 20090417 | 28 m ² | | | | | |
| | | | | | | 20110310 ～ 20110328 | 3 m ² | | | | | |
| | | | | | | 20110518 ～ 20111228 | 22 m ² | | | | | |
| | | | | | | 種別 | | | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
| | | | | | | ビワノクマ古墳 | 古墳 | | 古墳時代、近世 | 古墳、近世墓 | 石織、赤生土器、 須恵器、陶磁器 | 全長約50mの 前期前方後円墳 |
| 要約 | <p>京都平野の北部の独立丘陵上（標高 25m 前後）の古墳時代前期の前方後円墳（県指定史跡）。 以前は直径 25m の円墳とされていたが、今回の調査で全長 50m 程の前方後円墳であることが明らかになった。</p> | | | | | | | | | | | |

2013年3月22日 発行

ビワノクマ古墳

行橋市文化財調査報告書第47集

著作権所有 福岡県行橋市中央1丁目1番1号
発行者 行橋市教育委員会

印刷者 福岡県行橋市南大橋3丁目15番19号
京築印刷株式会社